

会員研究

師団長二人、博士二人

…柳田国男の閨閥

近藤 政次

序、小論のねらい

戦後、民俗学者として業績を積み上げ、「知の巨人」として広く知られる柳田国男だが、養子先の柳田一族の華麗とも言える人脈が意外と知られていない。華麗と言うものの、旧公家や旧大名ではなく、維新後の日本社会で自らの能力を頼み、血を流し刻苦勉励し、運命を切り拓いていった人たちである。軍人として日清、日露戦争を戦い、師団長（中将）そして男爵（華族）となった者が二人。博士（帝大教授）となった者二人。

いずれも他を頼まず榮譽、社会的地位、収入を手にした者たちである。柳田家第十一代当主となった国男の姻戚関係を見ると、民俗学者としての姿と違った角度、切り口でアプローチする可能性を有していると考ええる。

1、松岡国男から柳田国男へ

(1) 柳田家の養子となる

に婿養子に入り、十代当主となった人物である。安東菊子が国男と知りあったのは歌道を通じてであった。

国男は明治25年1月、次兄井上通泰の和歌の師松波遊山を通じて、桂園派の松浦萩坪（辰男）に入門、そこで田山花袋、安東菊子、柳田順（直平の長女）らと知り合った。青年たちと老齡の安東菊子は同門の士であった。

直平夫婦には4人の娘があった。安東菊子は青年松岡国男を孫娘たちの婿候補者として注意深くみていた。菊子が80歳（明治40年）になった時、歌集の作成を国男に依頼した。菊子の作歌を集めたら3万首の多きを数えたという。後年、国男の評に依れば「あまり上手の歌でなかった」とのこと。

(3) 安東家のこと

安東家は信州飯田藩の藩士で、代々同藩の槍術師範の家柄であり、国男の養父直平は安東辰武、菊子夫婦の次男。菊子は同藩家老職島北家の次女で、20歳の時に安東家に嫁いだ。

菊子の母千枝子は香川景樹門下の桜井春樹の妹で姉2人は信州の高遠藩、飯田藩の歌人に嫁いだ。

菊子夫婦には4人の男子があった。長男欽一郎は実家を継ぎ、銀行員、次男直平は先に記したように柳田家に養子として入り3男貞美は陸軍軍人となり大将、男爵となった。4男の武雄は福島県の中学校教員と、それぞれ家庭を築いた。

2、二人の師団長

国男の養子先の柳田直平家の親戚には日露戦争を戦った陸軍の師団長（中将）2人がいる。安東貞美と木越安綱である。

・安東貞美

安東貞美は先に記したように安東辰武と菊子夫婦の3男、直平の弟である。幼生期は久吉、のち貞美と改めた。習字と文学を高遠藩の儒者、中村黒水らに学んだ。明治3年、17歳の時に大阪兵学校に入り、卒業とともに少尉に任官した。明治26年、ヨーロッパへ、翌年帰国して歩兵大佐に昇進した。日清戦では支援部隊で出征。31年10月、台湾守備混成第2旅団長に就任した。

日露戦争では歩兵第19旅団長（少将）として出陣した。第2軍にて南山、得利寺での激戦を戦い、第4軍にて第10師団長として鴨

緑江軍司令官に転出した川村中将の後を引継ぎ、奉天会戦で力戦した。大正4年1月に陸軍大将、同年4月から7年6月まで台湾総督をつとめた。明治40年9月に日露戦の勲功により男爵を授けられた。

※貞美の妻八重子の実兄は鹿兒島県出身の海軍大将(のち元帥)の伊東祐亨である。伊東は明治建軍の功績者の一人。日清戦争では連合艦隊司令長官、黄海海戦で大勝した。日露戦では軍令部長として作戦全般を指導した。明治31年9月大将。39年1月元帥、伯爵。

・木越安綱

柳田直平の次女貞子を妻とした。木越は石川県出身。陸軍省の軍事課長、軍務局長を歴任し、明治34年2月に第23旅団長、37年11月に第5師団長となった。大正元年1月に陸軍大臣に就任した。戦歴は日清戦で第3師団(桂太郎師団長)の高級参謀として出征し、桂師団長を良く補佐した。日露戦では歩兵第23旅団長として出征した。第126師団(第1軍)下にて沙河会戦まで力戦した。会戦後、第5師団長(第4軍)とし

て黒溝台で苦戦する立見師団を救援して勇名をかせ、奉天会戦を戦った。

桂太郎が第3次内閣を組織した時、陸軍大臣として入閣した。次の山本権兵衛内閣でも留任した。37年10月中将、40年9月安東貞美らとともに男爵となる。

3、二人の博士

・矢田部良吉

直平の長女順(子)の夫である。矢田部は日本の植物分類研究のバイオニアとして知られ、東京帝大、理科大学の教授、理学博士である。矢田部は静岡県田方郡韭山の生まれ。蘭学者の父が死去した後、慶応初年に母と共に横浜へ来住した。中浜万次郎(ジョン万次郎)や大島圭介らから英学を習得し、明治2年開成学校教授試補、翌3年外務省に転じて森有礼に随行して訪米し、同地で官を辞して、官費留学生としてコーネル大学に入学、9年卒業して帰国した。ただちに開成学校教授就任、教育博物館長を兼務した。同校が東京帝国大学に改組されたのに伴い、理科大学の植物学教室の初代教授となつた。小石川植物園の整備や日

本の植物相の研究に打ち込んだ。明治28年東京高等師範学校校長兼東京音楽学校長に就任した。新体詩論の編著者、ローマ字普及や演劇改良などに尽力した。明治32年8月鎌倉由比ヶ浜で水死した。

・桑木巖翼

安東貞美の次女誠(子)の夫。明治7年東京牛込区に生まれる。旧金沢藩士の長男。東京帝大・文科大哲学科に入学し、ケール博士、井上哲次郎らに学ぶ。29年卒業し、第一高等学校教授兼大講師となる。明治33年『哲学概論』を刊行、同書は日本人の手になる概説書として広く読まれた。35年に東京帝大教授、翌36年に文学博士、39年京都帝大教授に転任、この夏誠(子)と結婚した。40、42年ドイツを中心にヨーロッパに留学し、大正3年東京帝大へもどり、日本におけるアカデミズム哲学の確立に力を尽くした。『カントと現代の哲学』、『テカルト』など著書多数。大正8年、吉野作造、福田徳三らとともに大正デモクラシーの一翼を担った。

補足……柳田国男の兄弟

国男は兄弟5人であり、兄2人、弟2人であり国男は真中の3番目

である。彼以外の4人を簡単に紹介しておこう。

長兄・松岡鼎：万延元年生まれ。明治11年神戸師範学校を卒業し小学校教員に、翌年に校長となり、松岡家の家長となる。2度結婚したが離婚する。明治14年代々松岡家の家業であつた医師をめざし、東京帝大・医科大学の別科(ドイツ語を使わず日本語で講義を行う医師速成機関)に入学した。書生をしながら医師の勉強に励んだ。明治19年12月に卒業し、翌20年茨城県北相馬郡布川町に知人の紹介で開業した。同年に国男を引き取り、22年には両親、静雄、輝夫を引き取り、面倒を見た。後、利根川の対岸の千葉県・布佐町に居を移した。

これら弟3人がそれぞれの道に進んだ後、多忙な医療活動のかたわら郡会議員や千葉県医師会の会長や布佐町長などを歴任した。次兄・井上通泰：慶応2年生まれ。明治10年、遠縁の医師井上家の養子となる。13年、東京に遊学、東京帝大・医科大学を卒業し、眼科医院を東京市内に開く。21年

『桂園一枝』を読み、香川景樹の歌に傾倒し、桂園研究に傾注して

『桂園叢書』を刊行した。22年から松波遊山について和歌を学ぶ。明治40年に宮中御歌所の寄人(勅任官待遇)を命ぜられ大正9年までつとめた。退任直後に宮中顧問官に就任した。昭和13年に貴族院議員に勅選された。歌集『南天荘歌集』ほか。著書に『播磨風土記新考』など多数。

次弟・松岡静雄：明治11年生まれ。28年に海軍兵学校に入る。日露戦、日独戦(第一次世界大戦)で戦功を立てて大佐に昇進したが、病に倒れ大正7年予備役編入。日蘭通交調査会理事をつとめた。その後、国語・言語学に没頭し、特に南洋諸島の民族研究の権威者として研究生生活を続けた。主著に『記紀研究』、『万葉集研究』などのほかに南洋諸島に関する民族誌及び言語研究書、論文が多数。

末弟・松岡咲丘(本名輝夫)：明治14年生まれ。30年に山名貫義に入門して、大和絵の道に進む。32年東京美術学校日本画科に入學し、荒木寛畝、川端玉章に師事する。卒業後画家の道を選び第10回文展に出品した「室君」は特選の部の首席を得て画壇における地位を固めた。大正7年から18

年間に渡って母校の教授をつとめ大和絵画風の振興や若手の育成に尽力した。

主な参考文献

『柳田国男伝』 柳田国男研究会・三一書房、『長野県歴史人物大事典』郷土出版社、『日本陸海軍人名辞典』芙蓉書房、『明治大正人物事典Ⅱ文学・芸術編』日外アソシエーツK・K、『和歌文学大事典』明治書院。

『貿易新報』明治39年9月20日号、『東京朝日新聞』明治25年7月23日号、明治44年10月16日号、『横浜貿易新報』大正6年10月31日号。

(終わり)

